

勝林寺尺報

明子ちゃんのお仏壇

本日は新しいお仏壇にご本山からお下げる
だいた三尊様の輿をおかけして「入仏法要」を
つとめさせていたゞきました。
この新しいご尊像を前にして、思いあらたに
「お仏壇」のお徳を、謹啓させていただきます。

まず、世間一般に、このお仏壇に対してもうもとんでもない思い違いがあるよう思います。

それは、お仏壇というところは仮様をお坐りするところ、ご祖先様を供養申し上げるところ。もつと日常的なところで申しますと、お仏壇というのは、仏様にお華をあげたり香をたいしてあげたりーそれを仏教のことばで「お莊嚴（おしようごん）」というのですがー要するにお仏壇とは、日々私たちが仏様を莊嚴して差し上げるところと、まあ一般に世間ではそう理解しておられるようです。

「私のうちの宝もの」
私のうちには宝ものがあります。
それは小さいけれど金ピカのお仏壇です。
いつも扉が開いていてお燈明もともつています
おかげでがすんだあと、私はいつも母といつ
しよに『らいはいのうた』をうたいます。その『
らいはいのうた』をうたうまえに母は、いつも口
ぐせのようにこんなことを言つてきかせてくれま
す。

一明子、このお仏壇は木、私たちが結婚したと
き、亡くなつたおじいちゃんがプレゼントしてくれ
ださつたお仏壇なの。

そのときおじいちゃんがおつしやつた。
「決してお仏壇には扉をたててはいけない。な
ぜかといつて、お仏壇はお浄土の出店や。如来さ
まの出張所や。わしらやお前たちの、くらしのな
か心のなかまでふみこんで来ていてくださるそ
の如来さまを、こちらから扉を閉めて向うへ押しや
るなんてもつたいないことや」

おじいちゃんはそのときそう言わはつたんや、
明子もな、そやらがんばらなあかんのやで

「般若さま。私は南無阿弥陀仏を信じてお念佛申
したら、目の先がサーツと明るくなり肩の荷が
おりてスースと軽くなる聞きましたので、一心
に如来さまを信じ一心に念佛申すのであります
が、励んでも勉めてもそのようにはなりません。信心
も念佛も、かえつて今では切のうござります。」
般若さまのおこたえ。
「不如実修行・名義不相応」：見当はずれ、す
れ進いの如来さま・お念佛を、お前勝手に見すぎ
ているからだ。
「如来さま」とは、私のスースと向うの方にい
て、信じて来い称えて来いと待つていてくださる
そのようなかたではないのだよ。
「実相身なり、為物身なりと知れ」
ほんとの「如来さま」は、真実からいちばん遠
いこの私のために、この私を真実のいのちにから
め取らねばと、今もはたらいてくださる、それが
本当の如来さま。
弥陀成仏のこのかたは、今に十劫をへたまえり
去けり。七輪集。よく世の眞實を照すなり。

二日 北陸プロツク布教師研修会
三日 出石細寺族婦人会（長草寺）
四日 『炎の山』（蓮如上人）銀剛会（京都南座）
五日 綱吉・勝利別水代経法座
六日 本山角教義講堂講
七日 十二日
八日 十三日
九日 十三日
十日 十四日
十一日 十五日
十二日 田中重雄（小山）氏宅法事
十三日 横山豊氏宅法事
十四日 宮崎喜代蔵氏宅法事・宮崎千秋氏宅法事・十六夜
十五日 会縁会（正福寺）

「莊厳されるお仏壇」という言い方はちょっと
通じにくいかも知れません。

ご門徒の家の明子ちゃんがこんな作文を書いてくれました。（いつかずつと前、テレホン法話で放送したことがありますから聞いて下さったかたもあろうかと思いますが）明子ちゃんはこんなふうに書いています。

見え様さま。このかたは古い中国のお坊さんで
見え様さまがおとうさんのようにお慕いになつた
かたですが、その見え様さまの所へ、今のこのこと
を尋ねに行つた人がありました。『淨土論註』
というお書物にそのことが出ております。
「彼の無碍光如來の名号は、よく衆生の一切
の無明を破し、よく衆生の一切の志願をみてた

壇にしてしまうことです。
どうぞ、明子ちゃんの仏壇販売の如米さまはいつも明子の家まで出張してくださつてゐるの、明子のお家にはお淨土の出店があるの。
いつも扉が開いていて、お燈明がともつていていつもそこからお呼び声がきこえていて、そこから如来さまが私のくらしを「お壯厳していくださる」お飾りくださる、そういうお仏壇をもちたるものです。

他のご宗旨の仏壇ならそうかも知れません。
その証拠に、他宗のお仏壇は本来ガランドウ
で何の飾りもありません。あれはやはり、こち
らから仏様の方へ向けてお花を上げたりお茶湯
を差し上げたり、何や彼やとお莊厳しょうごんして上げな
ければならないようになつております。
それにひきかえわが浄土真宗の仏壇は、そう
ではありますん、ホレご覽の通りこの家に運び
込込まれたときからすでに金ピカです。いろいろ
なお飾りも三つ真足も五具足も何も彼も、何か
ら何までそろつております。こちらから莊嚴し
て差し上げるまでもなく、ちゃんと『お莊嚴おじょうごん』
は出来上つております。

真宗のお仏壇は、だから莊嚴して差し上げる
仏壇ではない。いうなれば「莊嚴されるお仏壇」
といふべきでしよう。

これは大切なことです。
よくよく考えなおしてみなければ、せつかくお迎
えした如来様・お仏壇も、ほんとの真宗の如来様
お仏壇ではなくなる。

弥陀成仏のこのかたは、今に十劫をへたまえり
法身の光輪際もなく、世の盲冥を照すなり。
「世の盲冥」。一寸先も見えず、煩惱虛妄のやみ
のなかを尺取り虫のようにマユのなかの蚕のよう
に、はいざりまわつてくらしでいる私をこそと
四十八願成就して真実正覚の報身仏—南無阿弥陀
仏とお立ち下さつてから今、この私の今に到
るまで、一時寸時のいとまもなく、はたらきつゝ
け呼びつゝけていてくださるそのはたらきが、本
レ今私の暮らしのたゞ中に「方便法身の尊像」と
あらわれてくださつておるお仏壇の如来さまです
ソレ今私のこのきたない口からも南無阿弥陀仏と
お呼びくださるそのおよび声こそ、真実の如来さ
までです。

子供研修旅行 に参加して

斎藤昌子

八月十九日・早朝七時、勝林寺を出発・バスで一路京都へ・参加者四十八名の親と子とを乗せた車は、さいわい非常に順調に走り、予定通りの十一時、西本願寺に着きました。

た大きい虎。岩のうえにすわってこちらをにらんでいたライオン。猿ヶ島のかわいい猿たち。ベンギン・象・カバ・ゴリラ・フラミングなど、たくさん動物を見たり、乗物にのつたりして、楽しいひとときをすごしました。

ご院家様には、この全日程のその場その場で、幼なかつた子供のころのことをして織りませながら、心のひだにしみいるような大変いいご法話をしていただきました。

いま私は、京都のご本山にきています。
そのご本山でいま、お寺の子供研修会に八回
いかせていただいたので、表彰状と記念品とを

二法話 勝林寺住職

勝林寺住職

「パチパチパチ」と拍手が耳にはいつてきた。
とつぜん体がピクツとなつて、せずじがのびた。顔が赤くなつて頭がぼーつとしてしまいました。

新編西山房文集

くださったおはあちゃん。ほんとに、ありがとうございます。」
う。」
う。」

勝林寺

狄屋の間の天井に描かれたねこを見て、「すゝめの間」「がんの間」「菊の間」・能舞台の見学・さわぐ子は一人もいたくて、みんなお行儀よくして、先人の遺した文化財のなかに、すっぽりと入り込んでいたようでした。

さなむ珠のをもち両方のでのひらを介せても
南無阿弥陀仏を称えている子供たちの姿は、と
ても美しいものでありました。

咳ひとつ聞こえない広い御影堂のなかに、お
香のにおいがいっぱいにたちこめておりました

最後に、この行事を経えてみての私のさきやかな願いがござります。
それは、この子ども研修会は、もちろん子供のための、「ほとけの子供を育てる」ための行事であつたことは間違ひありません。
しかし、私は、はじめて参加させていただいて思うのですが、この行事のなかで、いちばんお育てになされた方の心の育成が、何よりも大事なことだと思つております。

今年の子供研修会は、本山まいりの一日旅行でした。本願寺は、とても大きくて古い建物でした。ろうかの板の上を歩くと、「ぎしつ、ぎしつ」と音が鳴ります。「うぐいすぱり」というのです大きな部屋もたくさんありました。ろうかみたいなところの天じょうには、ねこの絵がありました。そのねこの絵は、どこから見ても私を見ているように見えます。天じょういつぱいにかいてある本を、この一ひきのねこが見はつているのだそうです。

リンゴ ジャム
 材料
 リンゴ 450g 砂糖 リンゴの半量(デリシャスのようない
 目のリンゴなら3分の一量砂糖でよい) レモン汁 大2個
 水 2分1カップ

次に参拝部二階礼拝の間で、仏婦会長様よりこの子供研修会に連続参加された方に、表彰状と記念品がわたされました。

森戸怜子さん（八年）・村田恵さん（五年）のお二人でした。ご本人のがんばりと、ご家族のご協力に対する、大変ねうちのある表彰状です。みんなで大きな拍手をおくりました。

手づくり弁当の昼食をすませて、大谷本廟で納骨となれ。ここでも「ほとけの子」として掌を合わせる尊い姿を、ほんとにうれしく思いました。

次に、お待ちかねの動物園。